
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第171号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2005.11.17 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の

交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1336 部*****

□ 目次 □-----

<今週の提言> 日本のフード・セキュリティー 熊澤喜久雄

<山崎農業研究所情報>

現地研究会速報「生ゴミ資源化技術を実践主体に学ぶ」

<老兵の戯言> 海も瀕死寸前? 藤原 昇

<80才からのメッセージ> 憲法改正・自衛軍の保持反対 原田 勉

<田舎的暮らしと野菜の育て方の情報サイト

リトルファーミングクラブ だより>

国民的マッチングが必要な人と土地 増山博康

<元気な農業 元気な暮らし> (2005.11.8)

農文協が新しい雑誌を発行します 栗田庄一

<編集後記> 「おかわり！」と言われるのがうれしくて

<今週の提言> 日本のフード・セキュリティー

先日、レスター・ブラウン氏の「フード・セキュリティー」についての講演を拝聴した。氏は土地と水条件の悪化、農業生産技術の停滞などさまざまな要因を挙げ、「人類の生産活動が、地球の自然システムの限界を超えつつある」というこれまでの主張にかわりはないとし、それに対処することを強く訴えていた。話を聞きながら様々なことが頭をよぎった。

世界の8億の人が飢えている状況は一向に改善されてこない。世界的には飢餓と飽食が共存し、世界人口の2%の日本は世界の農産物貿易の10%も占めている。WTO体制下でのグローバリゼーションを至上とした経済秩序のなかでは、開発途上国の輸出拡大はその国の国内購買力の収縮を意味する。途上国における農民層の貧困化は深刻であり、貧困は社会不安を呼んでいる。内乱・テ

ロ、戦争のもとにもなる。

超大国アメリカに押しまわれ、食料自給率を40%にまで低下させている日本の現状に対する国民の不安は大きい。農水省の「不測時の食料安全保障」によると、「穀物、大豆及び関連製品の輸入の大幅な減少」などが起きたような場合、現在の耕地はもとより原野や放牧地なども利用し、さらに、熱量効率の高い作物へ転換したりして、必要な熱量（昭和20年代後半の2,020kcal）は確保できるとし、1日にご飯2杯、サツマイモ3本、ジャガイモ3個を基礎とした食事メニューを例示している。しかし、現在の土壌や農業機械・労働力の状況、石油・化学製品への依存などを考えると、わずか100万トンの米の備蓄がなくなる前に、大規模な新規開墾・播種・収穫ができるとは到底考えられない。

単に警鐘を鳴らすだけではなく、食料大国のアメリカに依存しその世界制覇戦略・軍事態勢に荷担することによって日本の食料輸入を保障するという思想を排して、平和政策の追求と日本農業の現実に沿った食料・飼料自給率の着実な向上を基礎としたフード・セキュリティ確立のための自主的国家政策の必要性を改めて痛感させられた。

熊澤 喜久雄

山崎農研会員 東京大学名誉教授

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<山崎農業研究所情報>

現地研究会速報「生ゴミ資源化技術を实践主体に学ぶ」

2005年11月12日（土）

埼玉県小川町 小川町風土活性化センター

小川町NPO法人小川町風土活性化センター主催の見学会に参加。小学校の会場は参加者50人余りでほぼ満員。そのうち山崎農研からは7名参加。はじめに概況説明40分、続いて、バイオガス発生プラントを見学（現在解体中）し、その後、実践農家として霜里農場を訪れ説明を聞いた。

1. 概況説明：小川町は里山。昔は絹、木材、和紙などで知られていた。現在は東京の熱波や、バブル期に急増したゴルフ場などの影響で、自然環境が変わ

った。町の人口は減少する、しかし生ゴミは増加するという傾向にあった。このような状況で、小川町の有志が生活を自然と共生することを目指し、発足させたのが、生ゴミ資源化の運動である。

小川町役場もこの趣旨に協力して、小川町環境基本計画を策定することになった（1999年）。その項目の一つに廃棄物処理問題があった。生ゴミは焼却処分をするのに燃料をたくさん消費する。そこで資源としてバイオガスと肥料にするために町も力を入れた。

生ゴミの資源化に要する処理経費は従来の焼却処分費と比べて安くなる。その差額（20円/kg）を活用して生ゴミにクーポン券（100円単位）を発行し、この券と引き替えに、農家から野菜を受け取ることができる。

この100世帯規模のバイオガス発生プラントを3年間利用してきたが、現在さらに300世帯分を増して400世帯が使えるような新たな装置建設の計画が進んでいる。この程度のを各地域に分散して造ることが、管理、地域環境や地域経済発展にも有利となる。

2. バイオガス発生プラント見学：今までの施設は解体中であつた。性能は100kg/日の処理で8立米/日のメタンガスがとれた。最後の残渣もほとんどが液体で水田、畑地に利用できる。この方法で燃料のガス、液肥が同時に製造できる。堆肥化の発熱は大気に拡散するが、このバイオガス利用にはロスがなく、生ゴミの資源としての価値は高い。ガス配管は簡単であり、100mくらいは容易である。

3. 霜里農場：経営者の金子さんは35年間有機農業をやってきた。生産者と消費者（現在30軒）を結びつけている。水田1.5ha、畑1.3ha、山林1.7ha。ダイズ、コムギ、水田アイガモ、畑は季節栽培、多品目栽培で60品目を生産。乳牛3頭、ニワトリ200羽、アイガモ120羽。太陽光発電を使い、ポンプ稼働、柵に通す電源にも用いている。バイオガス、液肥利用、バイオジーゼルなどで資源を有効に使っている。

（文責：安富六郎、石川秀勇）

<老兵の戯言> 海も瀕死寸前？

先日、はじめて「海の国際シンポ」に参加した。山陰の片田舎（島根県）出身である筆者は「日本海学」なるものがあることを初めて知った。「先生、島根と富山が中心ですよ」といわれて、ちよっぴり恥ずかしかった。いわれてみれば、この国の歴史や文化は、この「海」を越えてやって来たのだ。

また、このシンポで、我々の食卓にのぼる海産物も約「80%が輸入」である、という報告があり、我々の「命」が、外国によって支えられていることに驚かされた。さらに、最近、日本人も「魚を食わなく」なった、という話や魚の「食い方」を知らない、という話など、身近なところに、まだまだ多くの「食」と「命」に関する問題が山積していることも、思い知らされた。

懇親会では、日本海に浮かぶ小さな島の漁業組合長から、「先生、BSEや鳥インフルエンザで騒いでいる時に、なぜ“魚”を食べろ、といってくれないのですか」と、迫られ、「はっと」して、自分の無能・無知に気づいた。なぜ「豚」といったのだろうか、と。

海も、我々の予想以上に破壊されており、とくに、海底の汚染（ビニール）による貝類の全滅、海水の異変による日本近海での「魚類（種）と漁獲量」の激減、「鯖が鯛」くらいの大きさになる、という嘘のような話、コンクリート、と云う「便利」なものによって「陸も海」も、その姿が一変したこと、など、「びっくり」することばかりであった。

これまで、人類のしてきたこと「すべて」が、じわじわと「真綿で首を絞める」ように、我々の「命を脅かし」始めたことを痛感させられた。我々は、いま「何」をすべきなのか。

藤原 昇

山崎農業研究所会員・九州女子短期大学・客員教授

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<80才からのメッセージ> 憲法改正・自衛軍の保持反対

自民党は新憲法草案を10月28日決定した。

問題の中心である第9条の1項の戦争放棄の条文はそのまま維持するが、2項は全面的に改定する次の案である。

「◆第9条の2（自衛軍）

- 1 我が国の平和と独立並びに国及び国民の安全を確保するため、内閣総理大臣を最高指揮権者とする自衛軍を保持する。
- 2 自衛軍は、前項の規定による任務を遂行するための活動を行うにつき、法律の定めるところにより、国会の承認その他の統制に服する。
- 3 自衛軍は、第1項の規定による任務を遂行するための活動のほか、法律の定めるところにより、国際社会の平和と安全を確保するために国際的に協調して行われる活動及び緊急事態における公の秩序を維持し、又は国民の生命若しくは自由を守るための活動を行うことができる。
- 4 前2項に定めるもののほか、自衛軍の組織及び統制に関する事項は、法律で定める。」

つまり、現憲法9条の戦争放棄の条文を維持し、「自衛軍」の保持を明記し、集団的自衛権の行使や、国際協力で武力行使を容認するということである。

民主党は、去る4月25日憲法提言の骨子を発表している。9条については、専守防衛の考えと重なる「制約された自衛権」を明記し、自衛権に基づく武力行使を限定容認している。また国連主導の集団安全保障への参加を明確化、国連活動の一環としての活動範囲で、集団安全保障活動として、武力行為を含む安全保障基本法を整備、国会のチェック機能を確実にする「民主的統制」の規定を設ける。としている。

公明党は東順治国対委員長が「集団的自衛権や海外での武力行使にはくみしない」と表明している。

依然として「9条」の溝は三党の間で深く、「国民投票法案の制定が現実的な課題」と自民党幹部は口をそろえている。

小泉首相の盟友と言われる山崎副総理は、今後5年の間にもう一度総選挙が行われるが、その時の選挙の争点は憲法改正で、自民・民主・公明を含めた大

幅な政界再編が行われるだろうと観測している。

いずれにしても、憲法改正はいよいよ時間の問題になってきた。

イラクでの戦いは、ブッシュも小泉もまだまだ続ける考えだ。我々が経験した第2次世界大戦と性格が全く違う、テロ戦争という新しい戦争が世界各地で行われている。

その時に日本の自衛隊がイラク派遣と同じように愚かな政治家によって海外派遣などされるべきではない。

憲法改正で自衛軍保持は絶対反対である。

<参考リンク>

司法フリーライター：長嶺超輝（ながみね・まさき）さんブログから

法治国家つまみぐい：自民党の新憲法草案（新旧対照表）

http://miso.txt-nifty.com/tsumami/2005/10/post_7c8f.html

自民新憲法草案・国民的議論は熟したか／政治こそ憲法に従うべき 琉球新報

<http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-8013-storytopic-11.html>

【自民党改憲草案】戦争できる国にするのか 沖縄タイムス

http://www.okinawatimes.co.jp/edi/20051029.html#no_1

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

tom@nazuna.com

<http://nazuna.com/tom/>

<リトルファーミングクラブ だより>

国民的マッチングが必要な人と土地

11月14日の日経新聞に15～34歳のうち、フリーターが213万人、ニートが64万人（厚生労働省推計）と出ていました。（不登校・ひきこもりの

総数は129万人だそうです。)

「人材派遣業」の売上げを派遣された人全員が週休2日で常時仕事しているものとして単純計算すると、100万人ぐらいになります。

実際に「派遣」を待つ形で登録している人、「人材派遣業」に登録しているのではないけれども、事実上、似たようなライフスタイルを持つ人も含めると、おそらく、この10倍ぐらいになるでしょう。

こういう数字を見る度に、「一億総生き方道探し」状態じゃないかなと思います。

家庭に入った主婦の人が、もう一度働きだしたり、SOHOしたり、シニアの人がボランティア活動を始めたりと言うケースなども含めて、みんな自分の生き方を一生模索し続ける社会なのかもしれません。

(上記の数字に、M字型雇用の後半期主婦層や団塊の世代700万人など、思いつく限り「道探し潜在層」を考えて、総合計していくと、数千万人規模になるはずです。

人口23万人の東京都豊島区だけで「元気だけれども働いていない65歳以上人口」は2万3千〜8千人、つまり人口の1割以上にのぼるのです)

一方、土地の方は、生産調整や耕作放棄、遊休農地、低利用農地など事実上耕作されていない土地、「不在地主」の保有する山林などを総合計すると、国土の8分の1ぐらいが「管理不在」状態になっていることが分かります。

趣味やボランティアのレベルも含めて、「農地」と「人」のマッチングを進めていくかが課題です。

「人」の側に対して、「リトルファーミング＝兼農サラリーマン、兼農OL、兼農主婦、兼農SOHO、兼農シニア、・・・兼農××」と言う生き方を提示する機会を少しでも増やしたいと思います。

◆田舎的暮らしと野菜の育て方の情報サイト

リトルファーミングクラブ by 首都圏帰農サポートネットワーク

後援 社団法人 農山漁村文化協会

ウェブサイト：<http://www.kinou.net> メール：info@kinou.net

環境クラブ代表

首都圏帰農サポートネットワーク事務局長 増山 博康

<元気な農業 元気な暮らし> (2005.11.8)

農文協が新しい雑誌を発行します

ご無沙汰しました。

「元気な農業・元気に暮らし」の栗田です。仕事にかまけて通信が途切れておりました。で、いまごろまた宣伝かい？と言われるのを承知のうえで、新雑誌のご案内をいたします。

農文協は、あたらしい食のライフスタイル誌『うかたま』を12月5日に発刊します。『うかたま』って何のこと？ 「可愛く、美味しそうな名前」の由来は、やおよろずの神のなかで食べものの神様（宇迦御魂神・うかのみたまのかみ）の略称からのネーミングです。

「元気な農業・農村づくり」を応援してきた農文協が、なんでまた食分野の大衆的な実用誌『うかたま』を出すのかと言えば、これからの「食」のあり方、食の豊かさとは何かということを考え、実践する、読者参加型の雑誌をつくり、育てたいという思いからです。

農産物の価値には、「生産性」とか「経済性」とかの効率主義のものさしでは計れない「地域価値」があります。地域固有の食べものがあり、食べ方がある。日常生活の土台である食生活が地域に根ざしたものになること。地域それぞれに違う「地域の個性」が誇りになる暮らしへ。大量生産・大量流通の時代に、地域価値・地域の個性を再興・創造することが、現代の食と農の課題です。

「地域価値」を評価できる消費者を増やすことは、輸入の拡大を阻止する力にもなります。『うかたま』の発行は、農家だけでは農業・農村の未来は切り拓けない、国民のなかに農家の応援団を増やしたいとの思いからでもあります。だからといって堅苦しいお説教雑誌ではありません。

4つの編集方針を立てました。

(1) 地域の食文化や知恵を掘り起こす 古くからの料理と知恵・技を新しい

センスで紹介し、若い世代が作りたくなるように。

(2) 「食」の今をリアルに描く今の子どもや大人の食事がこれでいいのか、軽いタッチで鋭く切り込む。

(3) 農的暮らしのおもしろさを広げる農家の暮らしに学び、自然を活かす新しいライフスタイルを楽しく提案する。

(4) 自分でつくって食べて楽しむ こうつくれば簡単で美味しい！ 編集スタッフが一緒につくり、食べて確認して紹介する。

たとえば、創刊号の特集のひとつは「おもちエライ！」もうひとつは「100人の朝ごはん」。

『うかたま』1号の発売は、12月5日（年4回発行の季刊誌で、1冊780円）。ぜひお近くの書店で実物をごらんください。よし読者になって応援してやるかとお思ひの方には、定期購読（1年4冊分3120円）をおすすめします。送料サービスでご自宅に直送いたします。お問合せ、お申込みは小生のアドレスにお願いいたします。

■『うかたま』1号目次

12月発行 創刊号の主な内容

◆特集 おもちエライ！

日本全国のお雑煮、その作り方・食べ方、実際に自分でもちつきするときのコツまで。おもちを食べつくす知恵、毎日の食生活に取り入れよう！

◆特集 100人の朝ごはん

よそのおうちではいったいどんな朝ごはんを食べているの？ さまざまな職業、年代の人たちの朝ごはんを写真つきで紹介。それぞれの食べるものの違い、よく言われる食生活の乱れも見え、食べることの「今」が浮き彫りになります。

◆ここでしか食べられない郷土料理をつくる人たち／地域の産物を使ったその季節独特の郷土料理を、農家民宿や地域の食堂のメニューから料理のレシピを中心に紹介する。その背景にある地域の風土や食文化の伝承の取り組みも。

◆おいしい食べものの生まれるところ

◆タイムグラバあちゃんの味噌玉づくり

■季節ごとの食べること、暮らしを楽しむ連載

■・林弘子の四季旬菜の食べものづくり

- ・おとなのための家庭科教室
- ・みうたさんの季節のおやつ
- ・自分で耕して食べる 週末農園通い
- ・山の上の大家族 福岡県矢部村・原島さん一家
- ・赤ちゃんとお母さんのためのごはん
- ・安全安心な食について考える
- ・「食」を教える現場 他

※創刊号の内容は予告なく変更する場合があります。

田舎の本屋ニュース◆新雑誌「うかたま」創刊します！

<http://booknews.ruralnet.or.jp/index.php?itemid=180>

食農ネット・情報アンテナ：「季刊誌・うかたま」創刊 12/5

<http://syokunou.net/modules/news/article.php?storyid=77>

(社) 農山漁村文化協会 提携事業センター所長 栗田 庄一

〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1

TEL.03-3585-1144 FAX.03-3585-6466

kurita@mail.ruralnet.or.jp

<編集後記> 「おかわり！」と言われるのがうれしくて

休みの日の食事はわたしがつくることが多い。つくるといってもたいしたもの
はできず、たいてい冷蔵庫にあるものを適当に調理してすませるのだが。

最近子どもたちに評判がいいのが炒飯。市販の炒飯の元を使うので、「食べもの
の情報提供」をうたう『電子耕』の編集後記で書くのはなおさら気がひける
のだが、それでも評判がいいのだからつい書きたくなってしまふ。

評判がいいのはどうやら具の鮭フレークにあるらしい。それまでのベーコンや
らウインナーやらに代えてこれにしたとたん、「おかわり！」と言ってくれる

ようになったのだ。

たまにつくるくらいでは母親の手料理に勝てるはずはないし、料理は勝ち負けではないのはもちろんのこと。しかしこれまで「おかわり！」となかなか言ってもらえなかったお父さんとしてはうれしくて仕方がない。つい自分の分まで「食べるか？」などとすすめてしまうのであった。

2005年11月16日

山崎農業研究所会員・田口 均

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
- 5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 172号の締め切りは11月28日、発行は12月1日の予定です。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 171 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://blog.mag2.com/m/log/0000014872>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2005.11.17（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

*****ここまで『電子耕』*****

..